の古い時代に於ける形容詞カリ活用並びにズの補助活用ザリの存在は認め難いのであるから、萬葉集のいかなる歌をもカリ活用で訓むことは、少なくとも、萬葉一・二期の人麿作歌及び人麿歌集歌をカリ活用で訓むことは、語法上許容出来ない難点がある。従つて、人麿時代に属するような古い歌をカリ活用で訓むことは避けるのが穏当であり、「可奈之久安里家牟」（二十・四三三三）「古非之久安流倍之」（二十・四四〇八）「阿良波左受安利吉」（五・八五四）などの例を見ても明らかなように、萬葉人はこれら八音句も決して破調とは意識していないのであつて、カリ活用の認め難い時代の歌は、たとえ字余り句となつても、敢て未融合形「――クアリ」「――ズアリ」の形で施訓すべきものと思うのである。

〔註1〕『国語学辞典』形容詞の項　P296

〔註2〕春日政治博士『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』　P152

〔註3〕　註2の　P144～P156

〔註4〕亀井孝氏「憶良の貧窮問答歌の訓ふたつ」（『萬葉』第四号）

〔註5〕註3に同じ

〔註6〕註3に同じ

〔註7〕佐竹昭広氏「短歌字餘考」（『文学』第十四巻五号　P47～P48）

〔註8〕門前正彦氏「『聞きまがはさる』か『聞きまがはざる』か」（『国語国文』第二十五巻十二号　P48～P54）

〔註9〕門前正彦氏「漢文訓読史上の一問題――打消助動詞の連体形について――」（『訓点語と訓点資料』第八輯）

〔註10〕註9に同じ

「今昔物語集の文体と語法」

――「……クシテ」「……クテ」・打消の助動詞連体形・「如ク也」「如キ也」「如シ也」をめぐつて――

福山布威

一、

今昔物語の文章に漢文訓読体のものと、仮名文の系統を

ひく和文体のものとの二種類が存在することは周く知られているところである。その中には、両文体の交錯が認められるものもあるが、大体巻一から巻二十までの文章は漢文訓読体であり、巻廿二から巻卅一までの文章は和文的であるということもあらゆる方面から研究され述べられて来たのである。(註1)

そのような文体論は、今昔物語の語法その他を論ずる上にも根本的問題だと思われる。故に、先ず形容詞連用形に「シテ」及び「テ」が接続した「……クシテ」「……クテ」の各巻に於ける分布状態並びに打消の助動詞連体形「ヌ」「ザル」の使用頻度を調査する事によって、従来の文体論になお明確さを与え、それに立脚して、今昔物語の特異な語法だと云われる。所謂比況の助動詞「如シ」のヴアリエーションについて考察したい。(しかし、ここでは紙面に制限があるため、文体論を省き、最後の段階である「如シ」の特例について述べることにする。)(註2)

二、

今昔物語に於ける「如シ」には異様な活用があつて、従来注目をあびて来たところのものである。即ち「如キ」が連用法として用いられ、「如ク」が体言に続き、「如ク也」「如キ也」「如シ也」の三様式まであるなど特殊な例が存するのである。

就中私が興味深く思つたのは、終止の形に「如ク也」「如キ也」「如シ也」の三様があるということである。そこで、

(1) 「ゴトクアリ」は漢文訓読用語として存するが、その融合した「ゴトカリ」という形が皆無である。今昔物語に於ける「如ク也」は「ゴトクナリ」と訓んで、国文一般に用いられた「如シ」の補助活用と見るべきであろう。

(2) 「如キ也」は「ゴトキナリ」と訓むこと勿論可能であるが、古い訓法に従つて「ゴトキゾ」と訓むことは出来ないであろうか。

(3) 「如シ也」の「也」字を不読の助字と考えることが可能ではなかろうか。

という三つの推論のもとに一応の説明をつけたく思つたのである。ところが、幸か不幸か先般同じ目的で書かれた春日和男氏の「ゴトシといふ語の形態と位相——今昔物語集の用例二三——」という論文(註3)が発表されて、この三様の説明もほゞ落着いたようである。しかし前掲(2)(3)の見解は氏の見解といさゝか異にする点もあるので、氏の論を参考にさせていたゞきながら私の推論を進めてみたく思うのである。但し、本文の得られた巻一から巻五まで天竺部及び巻十一から巻卅一までの本朝部の用例によつて考えを進めて行くことにする。

（1）

「如クナリ」という語は、早くから和文脈に浸透して国文一般に用いられるようになり、「如シ」の補助活用をなすということは周知の事実で、今昔物語の「如ク也」もその例にもれないものである。これに対して、漢文訓読用語として「如クアリ」があつて、「如カリ」の潜在形と考えられるが、ずつと後世の俗語を除いては、決して融合しないということも広く言われてきている。

「如クナリ」について、松尾捨治郎博士は[註4]「如ク・ナリ」だと見て、この「如ク」は連体形であつたかと思われると言い、今昔物語に於いて「如ク」が体言に連なり、「如キ」が用言に続くという異例をあげて、形容詞動詞同源説から、この「如シ」も、

四段活に用ゐたり又形容詞の様に使つたりして一定して居ないのが此の語の活用発生初期の狀態であつた。即ち連用形如き連体形如くなどは四段であつて、其の名残が平安朝末期鎌倉期までも中流以下などの階級的方言として存して居て、其が今昔等に採録された。

と見ておられるがあまりにも想像に走つた推測のように思われる。事実、博士の説を裏づけるものとして挙げておられる、平家物語に形容詞の連体形が連用形的に用いられたという例も私の調査の範囲[註5]では見出されなかつたし、万葉集巻五・八一五番の歌「……烏梅乎乎利都都多努之岐乎倍米」の「多努之岐」は連体形が用言に続いた例としておられるが、これは準体言として問題ない所である。また、形容詞が四段に活用した未然形として万葉集巻十四の「……可久太爾毛久爾乃登保可婆……」をあげておられるが、これも東歌であつて、例として適当でない。

とにかく、以上の松尾博士の説は、「如クナリ」の成立事情の考え方に誤りがあるのであつて、「如クナリ」を「如ク」に「ナリ」が附いたとすると、断定の助動詞「ナリ」は連体形接続であるから、文法的に納得のいく説明は出来ないのである。

「如クナリ」は橋本進吉博士の言われるように[註6]、「如クニ」と「アリ」と合して出来たものと言うべきで、今昔物語にもその成立事情を思わせるに充分な「如クニゾ有ル」「如クニ非ズ」「如トクニ非ズ」などの語法が見出されるのである。

春日和男氏は[註7]、「如クニ」は「如シ」の副詞的用法を更に強化したものと見るべきで、漢文訓読上に発生したものではないということ、平安朝以後は「如ク」は直接用言に接続するよりも「ゴトクニ」の形で連用接続する傾向が強くなつたことを述べ、「如クナリ」は国文調の「如クニ」の上に生長した形態であると云つておられる。一方送り仮名による「如クニ」と「如ク」との差は、後者が数量的に遙かに優越していることを指摘し、純粋の漢文訓読文において

は「如ク」がその基本形であることになるから、補助活用としては「如クアリ」の形をとることは自然だとして、

要するに、ゴトシの補助活用は漢文訓読ではゴトクアリ（ゴトカリ）のカリ活用系である。換言すれば、ゴトシは多分に形容詞的である。然し国文体ではゴトシはゴトクニアリ（ゴトクナリ）を以つて補助活用とするからナリ活用であり、副詞乃至は形容動詞的である。

ゴトクナリがゴトシの補助活用として一般に認められてゐるのは、国文調として通用してゐるからであり、ゴトカリが認められてゐないのは、漢文訓読においてはその特性上ゴトクアリの形がそのまゝに原形を保ち、みだりにゴトカリの如き融合形を示さなかつた為であると思ふ。

と結論されていることに異論はないと思う。

「如シ」という語の特殊性の一つが漢文訓読調と国文調の位相のもとに明らかになつたのであるが、以上の考えをもとに今昔物語の「如ク也」「如ク有リ」を見ると、巻六から巻十までの震旦部を除いて「如ク也」の用例は三十五例（中一例如レ此ク也があるがカクノゴトシは用法が異ると言われており、ここでは一応省く）あるが、「如クアリ」の例は一例（「如レ此ク有（アル）」の例が他に三例あり、「如レ此クゾ有ケル」「如クナム有ツル」の如く係助詞をはさんだ例は若干見える）あるのみである。しかも、この一例の「如ク有リ」の「有リ」はもとより、三例の「如レ此ク有」の「有」も動詞的性格の強いものであつて、西大寺本金光明最勝王経古点などには「如クアル」が「如キ」と同じように用いられた例はあるが、やはり訓点語としての「如クアリ」は一般にこのような動詞的性格が幾分残り、「如カリ」という融合形にまで踏み切るにはもつと広汎な「如クアリ」の用法が必要であつたのであろう。

一方「如ク也」の用例も和文的文体だという巻二十二以後には少く、むしろ訓読調の巻十一から巻二十までに比較的多く見られる。

以上のことから考えるに、今昔物語における「如クアリ」は「如シ」の補助的役割において「如クナリ」と対立するにはあまりに弱く、国文調と漢文調の位相のもとでは「如シ」一般を訓点語として、和文的な「様ナリ」と対立させるべきであろう。[註8]

ただ、「如キ也」「如シ也」に比して「如ク也」が巻によつて数量の差こそあれ全巻通じて用いられている点は、「如クナリ」の広い用法の一つの現われであり、「如シ」という訓点語が「如クナリ」の形で和文に浸入して行つた過程を思わせる。

最後に「如ク也」の「也」字について考えてみよう。

春日和男氏[註9]は「なり」を新興語だと言い、「也」字が「訓としての『ナリ』に落付くに至つたのは和漢混交の和

文の発達によるものと思はれ云々」と云つておられるが、この「如ク也」は前述の通り「如クニ・アリ」が融合したもので、「如クナリ」の「ナリ」は普通一般の指定の助動詞「ナリ」とは成立事情を異にするものである。故に「如ク也」は「也」字の訓が「ナリ」に落着いた時、「如クナリ」の成立事情を無視して「也」字をあてたものと考えられる。

（2）

次に「如キ也」について考察する。

春日和男氏は[註10]「ゴトキの体言化即ち準体言としてのゴトキに指定の助動詞ナリの接続した形がゴトキナリであると考へることは無理ではないと思ふ」と述べ、つまり、「如キナリ」は純漢文訓読の上に起つた形態であると論断しておられる。

それを実証する確実な例として、

故に深く悪厭を生（じ）て毒を飲ミ高（き）ところより墜ツルが等キ種種の自殺をせしが如キなり。

食の自（ら）消するか如キなり。（以上成実論巻二十一天長五年——八二九年——点）

復、煩悩无（き）を以（て）の故に心に自在を得たりといふが如キなり〔也〕（法華義疏序品初三一〇行）

などがあり、平安朝以後の指定の助動詞「ナリ」の擡頭を思う時、「如キ也」を「如キナリ」と訓むことの可能性は一層強くなるのである。

しかし一方、「如クナリ」の広汎な活躍に対して「如キ也」が他の活用形を有しないことを思うと、「如キ也」を「如キナリ」と訓んで「如ク也」「如キ也」「如シ也」の混乱をもたらすまでもなく、「如キ也」は「如キゾ」と訓んではどうかという考えが起つてくる。

ここで少し指定の「ゾ」と「ナリ」について考える必要がある。

「如キゾ」と訓んだ場合の「ゾ」は係助詞「ゾ」の終助詞的用法ということになるが、「ゾ」という語は中称の代名詞「ソ」から発したと言われており、故に主観的な陳述能力を有するものである。これに対し、「ナリ」は元来「ニアリ」の融合した指定の助動詞と言われているため極めて客観的な陳述能力しか持ち得ない。また、「ゾ」は文献以前よりかなり広く用いられていたに相違なく、上代にあつては陳述指定の「ゾ」は「ナリ」よりも用例が多く、用度も広汎であるということが春日氏によつて実証されている。[註11]とにかく、「ゾ」と「ナリ」の消長については春日氏の次のような論に言いつくされていると思うので参考にさせていただくことにする。

「ぞ」は元来体言を自由に指定し得たであらう。併し「にあり」や「なり」の発生と共に次第にその指定性が限定され、遂に原則として連体形のみに接続すると

言ふ事になり、偶々これが漢文の訓読に適用されると、末尾の「也」の置字に関興して「ぞ」と訓ずる機会が生ずる様になつたもので、その顕著な場合は註釈文においてであつたと言ふことになる。さて上代から中古に移るや、「ぞ」の用途が極度に限定されて、新興語「なり」が擡頭し来つた事は既に述べた所であるが、これが「也」字に関係して「ぞ」よりも「なり」を以て断止する方が一般の漢文では有力になつたものと想像される。（中略）新興語「なり」は原則として体言をそのまま承接してこれに陳述力を付与する所謂指定の助動詞であつて、連体形をそのまま承接するのはやゝ後に起こつた変則であることになる。むしろその様な場合には「ぞ」を以つてする方が正しかつた時代が考へられる。上代において連体形承接の「なり」に確実な例がないのはこの様な事情によるのであらう。のみならず「ぞ」が口語的であるのに対し、「なり」は一般漢文訓読、乃至は一般文章用語として極めて用途が広くなり、平安朝以後この傾向は特に著しく「ぞ」は僅かに註釈文の中に古風な面影を残すに至つたものと思はれる。(註12)

この論をふまえて私の推論をもう少し発展させてみる。

「如キ也」の例は巻一から巻五までに八例、巻十一から巻十七までに四例存する。この部分は天竺及び本朝仏法部で、古い仏典もしくは異域の仏典によつたもので、そこに現われる「如キ也」を「如キゾ」と訓んだ場合、「ゾ」は古い語法であるという論に副うものである。

また、前八例の中七例までが会話文に用いられ、他の一例も「法ヲ聞ムガ為詣タル功徳如此キ也トナム語リ伝ヘタルト也」というのであつて、会話的気分の箇所に用いられている。この事実は対話的色彩が強いという「ゾ」の性格と一致するものがあるように思う。

次に、石山寺旧蔵妙法蓮華経玄賛の音義の部は「也」字に関して「ゾ」と訓んだ例の頻出することで有名だといわれるが、天暦年間の施点で比較的新しいにも拘らず、

慢者玉篇易也軽侮也かろミアナヅルゾ也、曜玉篇咆也なクゾ也、

など連体形接続の「ゾ」の例があげられる。しかも同じ法華玄賛には、

経（に）余時大衆中乃至亦得此法到於涅槃（と）いふが如キゾ。

という例も存する。今昔物語より時代の下る平家物語の会話文にも「ゾ」で指定した語法は多い。

以上の事からも今昔物語の「如キ也」を「如キゾ」と訓んで何ら抵触は感じないのである。(註13)

このように二者が可能になつたわけであるが、前掲の明らかに「如キナリ」と訓んだ例が、平安も初期の点本に多数見出されることはゆるがせに出来ない。「也」字に関し

て「ゾ」と訓んだ例もここでは比重が軽くなる。

今昔物語の成立と大体時代を同じくすると考えられる「伊呂波字類抄」「類聚名義鈔」を見ると、

也　ナリ　マタカ　ハルカナリ、（類聚名義鈔）

也　ナリ　焉　矣　給（伊呂波字類抄）

とあつて「也」字は「ナリ」の訓に落着いていたと思われるのである。

結局、今昔物語の「如キ也」は「如キナリ」と訓むべきであろう。しかし、春日氏の言われる「ゾ」と「ナリ」の消長を考慮に入れると古くは当然「如キ也」は「如キゾ」と訓まれたものであり、今昔物語がその訓法によつたものと見ても支障はあるまい。たゞ、「ナリ」が擡頭するにつれて次第に「如キナリ」と訓まれる様になり、この訓が固定して行つたと見ることが最も妥当な考えだと思うのである。

（3）

「如シ也」の用例は巻十一以後は皆無で、巻五までには、巻二に一例、巻五に一例存する他は巻四に集中的に五例見出される。

巻二の第廿四話「福不養（オトロヘ）ズシテ栖（スミ）カ大王ノ宮ノ如シ也ト」の一例に、日本古典文学大系「今昔物語集」では「如シ也（ナル）」と仮名をふつてある。これについて頭注では「諸本『如ク也』底本だけ『如シ也』に作る」と言い、補注に

数見出されることはゆるがせに出来ない。「也」字に関し

「『也』は漢文の助字であるから訓読における不読文字と考えることも一案であろうが（中略）他にも明かに終止形から『也』に続く例があるので、なおゴトシナリという一語法の存在を率直に認めるべきであろう」として、傍証例として、連体形に接続すると考えられる「カ」が終止形に続く例が若干見える事実をあげている。しかしその例も諸本一致せず、異同のあるものばかりで納得を得るだけの明確な傍証例とは言い得ない。

私はむしろ「也」字を不読の助字とした方が素直であるように思う。なんとなれば、春日氏の次のような論以下を考え合せると頷けることと思う。即ち、（註14）

上代における指定表現の基本型は係助詞「ぞ」及び助動詞「なり」によるのが原則であつたろうことを述べたのであるが、この他に恐らく更に原始的な表現法があつたのではないかと思ふ。全然指定辞を省いて陳述の形式がない例を見る。（中略）この様な辞（指示代名詞から起つた前述の「ぞ」のこと）が体言に後続して陳述性を付与し、指定表現を形成する事自体がその以前において陳述辞を欠如した表現があつたことを物語つてゐる様に思はれる。

というのである。（しかし氏は「如シ也」をゴトシナリと訓んでおられる）

いわば「也」字に訓を与えない指定法が認められるので

あつて、古い例では万葉集に、

朝霧乃如也夕霧乃如也。（巻二・二一七）

という用字法があり、また、

大道智勝仏の十六王子の法花を説きたまふト請ひたてまつるが如シ〔也〕（法華義疏長保点序品初）―（長保元年―九九九―）故に食味を廻変するがゴトシ〔也〕（同じく序品末）

の例も存すること、今昔物語に於けるわずか七例の「如シ也」が古い仏典などを出典とする天竺の部に限つて現われるという事実、[註15]

終ニ責メ討ツ事ヲ得テ本ノ国ニ還テ即位本ノ如ク也。

太子亦、本ノ国ニ還テ国位ヲ委付シテ、国ヲ治ル事、父ノ王ノ　シ也。（巻五・七話）

というように一カ所に「如ク也」「如シ也」が同時に用いられている事実（同じ表現法の同じく言い切つた形に「如クナリ」「如シナリ」という形式の似かよつた、しかし違つた語法が用いられていることは表記者の無頓着もはなはだしいもので、むしろ「如シ」と言い切つた形と見た方が自然である）などから考えて、「如シ也」は漢文の影響を直接受けた古い語法で、「也」字は不読の助字だと言うことが出来よう。その恰好の例として、

釈迦ハ父ノ如シ我ハ母ノ如シ婆婆世界ノ衆生ハ赤子ノ如シ也。（巻六・才十五話）[註16]

がある。これは同じ表現法で、最後の「如シ」に助字として「也」字を置いたものと見るべきであろう。

三、

以上、「如シ」という語の特異性の一面を今昔物語の「如ク也」「如キ也」「如シ也」について考察してきた。要するに、「如ク也」は和文脈を足場として発展した「如シ」の補助活用「如クナリ」で「如ク＝●アリ」が合して出来たものと考えられ、「如キ也」は「也」字の訓「ゾ」と「ナリ」の消長を考えると「如キゾ」と訓まれた時代も認め得るわけで、今昔物語の例もそれに従うこと勿論可能であるが、既に「如キナリ」という訓に落着いていたものと思われる。故に「如キ也」は「如シ」の連体形に助動詞「ナリ」が附いたもので、「如クナリ」とは異質の語法である。「如シ也」は従来「如シナリ」と訓まれているが、何としても不自然で、むしろ「也」字を置字と見た方が穏当であろう。そして、和文脈に成長した「如クナリ」に対して、「如キ也」「如シ也」は漢文脈の影響による語法だということが出来よう。

しかし、「如シ」の異例は他にも見られ、更に広汎な踏査の上に立たなければ容易に解決出来ない問題であることが痛感される次才である。

註

1　峰岸明氏「今昔物語の文体について」（「国文学」才

三巻才十一号）同「今昔物語集における変体漢文の影響について」（「国語学」三十六輯）など。

2 門前正彦氏「今昔物語の文章おぼえがき―打消の助動詞連体形について―」（「解釈」昭和三十二年二月）があるが得られなかつた。

3 「文芸と思想」才十八号昭和三十四年十一月福岡女子大創立四十周年記念国語学国文学特集号所収。

4 「国語法論攷」六二一頁以下、

5 流布本を底本とした佐伯常麿校註の「校註平家物語」によつた。

6 「新文典別記」二四三頁

7 「ゴトシといふ語の形態と位相―今昔物語集の用例二三―」（「文芸と思想」才十八号）

8 この方面から文体を論じたものに、堀田要治氏の「如シと様ナリとから見た今昔物語の文章」（「国語と国文学」才十八巻才十号）がある。

9 「也字の訓について」―「ぞ」と「なり」の消長（「国語国文」才二十四巻才二号）

10 7に同じ。

11 9に同じ。

12 9に同じ。

13 古典文学大系「今昔物語集」で「ゴトキナリ」と仮名をふつてあるのは校注者がつけたもので原典にそうあるのではない。

14 「指定表現の様式―発生過程よりの考察―」（「文学研究」才五十輯）

15 春日和男氏の「ゴトシといふ語の形態と位相」の引用例を借用した。

16 15に同じ。

〃『紫式部日記』にあらわれた紫式部の性格と心理〃

白土ルリ子

『紫式部日記』は、摂関制藤原政権の極盛期、道長の女である中宮彰子に仕えた紫式部が、その宮仕え女房としての見聞と折りに触れての感想をしるした断片的な記録である。この日記を基とし、始めより記事の区分に通し番号（①～㉑）をつけ、それを内容ごとに五つ（(a)～(e)）に分類し（詳細な分類内訳は省略）、以上を検討することによつて、天才作家として古来より世人に崇敬されてきた紫式部の心理、性格を身近なものとして再現してみたい。尚、分類内訳を簡単にまとめ次に掲げる。底本は池田亀鑑校訂